学位論文審査報告書

氏　　名：　楠　淳證
学位の種類：　博士(文学)
論 文 題 目：　貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究　仏道篇

I. 前 言

楠淳證氏が提出した学位請求論文「貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究　仏道篇」について、審査の結果を報告する。

審査対象論文は、2019 年 7 月に法藏館より出版された同名の著書であり、同書は B5 版で、1 頁 47 文字×17 行、総頁数 734 頁にも及ぶ。『唯識論尋思鈔』は、日本唯識史に不朽の名声と実績を残した解脱房貞慶（1155～1213）が、建仁元年（1201）に著した『別要』七十余帖と『通要』六百余帖からなる法相論義に関する総合的研究書（論義抄）である。楠氏の論文は、この『唯識論尋思鈔』が貞慶の仏道実践のために著したことと、その意義を明らかにする目的で著述されたものである。本書の本論は三部構成となっており、貞慶の「仏道論」に主点を置き、その根幹である「五姓論」「三祇論」「成道論」に関する諸論議を取り上げて論述している。

まず、序論において、簡略に日本における法相教学（法相宗）の相承について述べ、その上で日本唯識修学の伝統は論義研鑽にあったとして、その展開を①論義形成期、②論義大成期、③論義展開期の三期に分け、併せて本研究書の著述意図を明らかにしている。

次に、三部構成の本論の第一部においては、「貞慶遁世の意義」「『唯識論尋思鈔』撰述の意義」「諸信仰展開の意義」を明らかにし、法相論義の形成についても論じている。次いで、第二部においては、貞慶教学の仏道論の根幹をなす「五姓論」「三祇論」ならびに浄業の実践による浄土知見の「行道論」に関する諸論義を取り上げて検証し、論義に依拠した貞慶教学と、貞慶の仏道論について考究している。そして、第三部において、今回の研究にかかわる「摂在一刹那」「一仏繫属」「変化長時浄土有無」「命終心相」の四篇の論義について翻刻読解研究を行なっている。

最後に、結論において、貞慶が最期に口述筆記させた書で、唯識行者の仏道実践の根幹が唯識観にあることを述べた『修行要抄』を用いて、彼が唯識の道理を観ずることによって円成の真実に悟入することができるとを論じていたことを明らかにしている。そして、菩薩種姓の自覚のもとに、三阿僧祇劫にわたるの修行の実践が大慈悲の実践であって、唯識観こそが衆生化益の大乗の利他行であることを主張した人物が貞慶であったと結論づけている。

このように、本論文は、一貫して貞慶の仏道という観点から、『唯識論尋思鈔』所収の未翻刻であった諸論義、および同書以外にも、関連する諸資料や論義を用いて、貞慶の教学を解明しようとした研究書であり、これまでの楠氏の長期にわたる論義研究の成果をまとめた意欲的かつ画期的な内容となっている。

II. 目 次

序　論

本　論
　第一部　貞慶の仏道論
　　第一章　遁世と仏道
　　　第一節　貞慶の遁世
　　　第二節　貞慶消息「故解脱房遣坂僧正之許消息之状」
　　　第三節　遁世の意義
　　第二章　論義と仏道
　　　第一節　法相論義の形成と展開
　　　第二節　貞慶撰『唯識論尋思鈔』の成立
　　　第三節　『唯識論尋思鈔』撰述の意義
　　第三章　講式と仏道
　　　第一節　仏道論より見た伝灯法会
　　　第二節　貞慶撰述の講式と浄土信仰
　　　第三節　貞慶撰述の講式と余他の諸信仰

　第二部　貞慶教学（論義）と仏道
　　第一章　五姓成道論の展開
　　　第一節　はじめに
　　　第二節　五姓各別説の成立
　　　第三節　『尋思別要』における一乗融会論
　　　　第一項　「一乗五姓了不了義」における会通論理の特色
　　　　第二項　『尋思別要』における「理の一乗」説の淵源
　　　第四節　『尋思別要』における定姓二乗論と無姓論
　　　第五節　『尋思別要』における大悲闡提論
　　　　第一項　中国三祖の定判
　　　　第二項　不成仏説の展開
　　　　第三項　成仏説の展開
　　　　第四項　大悲闡提成不成説の展開
　　　第六節　無性闡提会通論の展開
　　　第七節　むすび
　　第二章　三祇成道論の展開
　　　第一節　はじめに
　　　第二節　「摂在一刹那」と仏道
　　　　第一項　摂在一刹那論の概要
　　　　第二項　『般若臺談抄』と『唯識論尋思鈔』の関係
　　　　第三項　『般若臺談抄』の摂在一刹那論
　　　　第四項　『尋思通要』の摂在一刹那論

第三節　「多仏繋属」と仏道
第一項　はじめに
第二項　一仏繋属の伝統説
第三項　「一仏繋属菩薩」否定の新展開
第四項　『興福寺奏達状』『興福寺奏状』に見られる「弥陀一仏繋属」批判
第四節　むすび
第三章　浄土成道論の展開
第一節　はじめに
第二節　多重浄土論と一四天下論
第三節　弥陀浄土信仰展開の諸理論
第一項　弥陀浄土信仰断念の理由
第二項　安養通化論の構築
第三項　処々不定論による報化二土一体同処論の構築
第四項　凡入報土論の展開
第四節　釈迦・弥勒・観音の三尊浄土信仰の展開
第一項　釈迦浄土信仰展開の理論
第二項　弥勒浄土信仰展開の理論
第三項　観音浄土信仰展開の理論
第五節　むすび

第三部『唯識論尋思鈔』の翻刻読解研究
第一章　「摂在一刹那」の展開
第一節　はじめに
第二節　『般若臺談抄』の「摂在一刹那」
第三節　『尋思通要』の「摂在一刹那」
第四節　むすび
第二章　「一仏繋属」の展開
第一節　はじめに
第二節　『尋思別要』の「菩薩種姓一仏繋属有無」
第三節　『尋思通要』の「一仏繋属事」
第四節　むすび
第三章　「変化長時浄土有無」の展開
第一節　はじめに
第二節　変化長時浄土有無
第三節　諸仏本願取浄穢二土差別
第四節　知足内院浄穢義
第五節　西方有共義
第六節　むすび
第四章　「命終心相」の展開
第一節　はじめに

第二節　命終心相
第三節　むすび

結　論

III.　論文の要旨

【序　論】

序論において、まず、日本における法相教学（法相宗）の相承について、簡略に記述し、本研究著述の意図を明らかにしている。

法相唯識教学は、7 世紀の後半から 8 世紀の前半にかけて、4 回にわたって日本に伝来しているが、やがて道昭（629～700）による第 1 伝と、智通・智達による第 2 伝が合して南寺伝となり、智鳳・智鸞・智雄による第 3 伝と、玄昉（691～746）による第四伝が合して北寺伝となった。そして、それぞれ元興寺と興福寺を本所として展開するに至った。この両寺の学風については幾つもの相違点があったが、「論義の時代」を迎えると、善珠伝・護命伝・子嶋伝・修学房御義壺坂御義・海住山御義などと称される各人各様の学説が展開するようになった。このため、楠氏は日本唯識の展開を、

①論義形成期　　日本に唯識思想が伝来されてより、『成唯識論』の論義テーマ（論題）が種々に形成されていった時代（奈良から平安末期）。

②論義大成期　　前代の諸論義を集大成して独自の研究を加味した、蔵俊撰『菩提院抄』・貞慶撰『唯識論尋思鈔』・良算編『成唯識論同学鈔』等の大部の論義鈔が作成された時代（平安末期から鎌倉初期）。

③論義展開期　　前記の論義抄が成立して以降、良算・良遍・光胤・興基等の多数の学僧によって一論題についての論義書である短釈が作成されていった時代（鎌倉初期から江戸期）。

の三期に分けて研究すべきであると提唱している。

そして、このような展開の中で、日本の唯識史上において多大な影響を遺した学匠が解脱房貞慶であると述べる。さらに、この貞慶の著した七十余条の「別要」と六百余条の「通要」よりなる論義抄が『唯識論尋思鈔』であって、本書が後の学侶に等しく尊重され、依用された書であったと指摘している。また、本書の撰述についても、本書は貞慶が笠置に遁世した後の建仁元年（1201）に撰述していることから、論義による立身出世のために著したものとは考えられないとして、何故に貞慶が本書を著したのかという点について、「仏道実践」のためであったと主張している。その上で、この研究も目的は、この点を明確にするためのものであったと述べている。しかしながら、本書は膨大な書物であるため、今回の研究においては、「貞慶の仏道論」を一貫したテーマに設定し、その根幹をなす「五姓論」「三祇論」、ならびに浄業の実践による浄土知見の「行道論」に関する諸論義を取りあげ検証することにしたと、本研究著述の意義を説述している。

【本　論】

本論は三部形式で論述されている。第一部においては「貞慶遁世の意義」「唯識論尋思鈔撰述の意義」「諸信仰展開の意義」を論じ、第二部においては貞慶教学の仏道論の根幹をなす「五姓論」「三祇論」、ならびに浄業の実践による浄土知見の「行道論」に関する諸論義を取り上げて検証し、第三部において今回の研究にかかわる「摂在一刹那」「一仏繋属」「変化長時浄土有無」「命終心相」の四篇の論義テーマについて、翻刻読解研究を行なっている。

その概要は、以下の通りである。

〔第一部　貞慶の仏道論〕

第一章においては、貞慶の生涯について、楠氏はすでに 2010 年刊行の前著『心要鈔講読』で略説していることから、今回、新たに氏が発見した新資料『故解脱房遣坂僧正之許消息之状』（貞慶消息）によって、これを翻刻読解を行い、その結果、貞慶の遁世の真因が「世間の無常を厭う」点にあったことを論証している。

次に、**第二章**において、まず法相論義の形成と展開を三会・三講の設立事情について論じ、その上で『法勝寺御八講問答記』に集録される貞慶の論義内容を検証し、遁世以前から、貞慶がすでに仏道論に着目して論義問答に臨んでいたこと等を論じている。併せて、筆者が蒐集した二千有余におよぶ論義短釈の分析を行い、さらに『尋思別要』の七十余条におよぶ論題の整理等も示している。これらの検証作業によって、『唯識論尋思鈔』が単なる論義による教義研鑽に終始するものではなく、本書は「世間の無常を厭う」貞慶が、遁世の後に撰述した仏道実践の理論構築のための教学書であるとともに、論義研鑽そのものが、貞慶の仏道成就の「一縁」に他ならなかったことを論証している。

そして、**第三章**において、伝灯法会が実は仏道実践の一環であることを、経論疏章抄等を根拠に論じている。すなわち、法会には大別して「読経・講説・論義・悔過・説戒・修法」の六種を核とするものがあるが、これらの法会の本質が仏道にあることを、『阿含経』『般若経』『涅槃経』『華厳経』等によって考証している。さらに、第七番目の法会といわれる講式法会を取り上げ、講式こそが仏道実践の具体的な理論展開を示すものに他ならず、貞慶が「浄業の実践による浄土知見・見仏聞法の仏道」を実践しようとしていたことを明らかにしている。そして、貞慶の弥陀・釈迦・弥勒・観音の四尊に対する浄土信仰の意義をこの面より解明し、貞慶の余他の諸信仰が四尊浄土信仰を資助する位置づけにあったと結論づけている。その上で、今日の学会での貞慶の多様な講式類の存在は、彼に多様な信仰があったとする見解を斥けている。

〔第二部　貞慶教学（論義）と仏道〕

第一章においては、まず、貞慶が仏道実践を理論化するにあたって大きな壁となっていた法相教学の「五姓各別説」について論じられる。最初に五姓各別説の成立について論説し、次いで五姓の実状が、菩薩グループ（定姓菩薩・不定姓菩薩・断善闡提・大悲闡提）と二乗グループ（定姓二乗・不定姓二乗）、および無性闡提の三種に組み換えられること

を筆者独自の図によって明示し、五姓各別説の説かれた意義が崇高な菩薩の道（転識得智の仏道）を歩むことを勧める点にあったことを指摘している。そして、『尋思別要』の「種姓義」を整理した上で、貞慶が天台宗等の一乗家に対して、「真の一乗・仮の三乗」と説くのが『法華経』、「真の一乗・長時の五姓」と説くのが『解深密経』であったと説いていたことも明らかにし、彼が慈恩大師の説を継承して「仏説は全て真実であり、一乗も五姓も共に説くことが仏意に適う」と考えていたことなどを論じている。さらに、因明の論証方式を用いて、貞慶が五姓の根拠が経典にあることを改めて明言したと指摘している。その上で、「一切衆生を救い尽くさなければ仏にはならない」という究極の悲願をもって仏道を歩むことを望んだ貞慶にとって、無姓有情の中の「大悲闡提」こそが、彼の仏道論の終極のすがた、すなわち「大悲の仏道」であったと主張している。そして、貞慶が「無性闡提」への不安を払拭し、自らが菩薩種姓であるとの自覚を示した理論を解説し、最後に貞慶の弟子である良算編『成唯識論同学鈔』の「種姓義」においても、同様の論理構築がなされていたことを指摘しつつ、『尋思鈔』と『同学鈔』のスタンスの違いを明らかにしている。

第二章においては、法相教学独自の主張である三阿僧祇劫成道論について、まず「三阿僧祇劫」の根拠となる証文を示し、その上で論義テーマ「摂在一刹那」に対する貞慶の見解を検証し、次いで凡入報土を説く法然の教説に対して「多仏繋属」を明言して、三祇阿僧祇劫の歴事諸仏の義を主張した貞慶の真意を明らかにしている。

すなわち、最初に論義「摂在一刹那」の概要を解説した後、『般若臺談抄』と『尋思通要』の見解を検証し、「如幻論」と「不一不異論」をもって、貞慶が実の三祇が仏果の一念、ひいては現在の一念に摂まるという説を明示する。そして、貞慶が三祇の実行を尊い仏行として理論化したことを示し、「如幻論」が貞慶教学の骨子であったことを指摘している。次いで、貞慶の「三祇の実行」の主張に対する法然の「弥陀一仏信仰」による「凡入報土論」についての貞慶の見解を、「一仏繋属」の論義テーマによって検証する。つまり、法然浄土教を弾劾した貞慶起草の『興福寺奏状』と、その草稿本である『興福寺奏達状』の両書状に示される九箇条の過失が、①「凡入報土」、②「魔界法滅」、③「一仏繋属」の三点に集約され、しかも「一仏繋属」より「魔界法滅」や「凡入報土」への展開のあったことを論じている。その上で、『尋思通要』と『尋思別要』の「一仏繋属」を用いて、法相宗では伝統的に一仏繋属も多仏繋属も共に認める立場にあったにもかかわらず、貞慶は「一仏繋属菩薩」の存在を徹底して否定し、「共は三乗、不共は二乗」といい、「菩薩は必ず多仏に繋属する」と主張していたことを指摘している。最後に、「摂在一刹那」「一仏繋属」の研鑽によって、貞慶の「三祇成道論」が構築され、貞慶の仏道論の終極は、上品無漏種子の現行による証果にあるが、断惑論の観点より見れば仏果障をいつ断ずるのかが、他宗を巻き込んだ大きな諍論となっていたことを指摘し、三祇成道を実事であるとして護持・研鑽した貞慶教学の意義について論じている。

第三章においては、法相教学の根底をなす「五姓論」「三祇論」についての貞慶の独自の理論を検証した上で、貞慶が示した実践的な仏道理論である「浄土知見の行道論」について論じている。

すなわち、最初に唯識観のあり方について論じ、貞慶が念仏三昧こそが唯識観であると認識していたことを示す。その上で、貞慶の浄土教思想の根底には法相教学における「多重浄土論」があり、初心の行者は「一の四天下」しか知見しえない点より、多仏繋属の立場にありながら、今生では最終的に一仏の浄土しか望み得ないと見ていたことを指摘する。そして、貞慶が弥陀浄土信仰を断念した理由について、『愚迷発心集』と『感應抄』を用いて、「五逆愚迷」と「誹謗正法」への悔恨が、「分を超えたる望みである弥陀信仰」（凡入報土）を断念させたと指摘している。さらに、貞慶は弥陀に化土がなければ願生しえないことを、八種の文理と九種の証文によって示した弥陀浄土願生の理論とも言うべき「安養通化論」を構築していたことを明らかにしている。また、これを基に貞慶が処々不定による「報化二土一体同処論」を構築し、独自の「凡入報土論」を展開していたことも指摘している。貞慶の浄土の見解については、彼が多重浄土論を唱えていたことを、『尋思別要』の論義テーマ「処々不定一言可有多義事」を補足する理論として提示し、論証している。また、貞慶撰『安養報化』には、報土と化土の一体を説き、「如幻」であるからこそ、互いに碍げあうということがないと「如幻論」が用いられていたことを論じ、これによって「処々不定論」を元にした「報化二土一体同処論」が構築されて、法然と異なる貞慶独自の「凡入報土論」が展開していくことになったと論じている。さらに、貞慶の「凡入報土論」は、「極速三生論」によるものでもあったことを、『心要鈔』と『発心講式』とを用いて論証している。

そして、本章の最後に、貞慶の釈迦浄土信仰・弥勒浄土信仰・観音浄土信仰の理論について検証している。すなわち、釈迦浄土信仰は、多重浄土論と報化二土一体同処論、さらには如幻論等を用いて構築していたを、次いで弥勒浄土信仰は、三身成道異時論によって展開した信仰であることを、また観音浄土信仰は、「実成・実菩薩論」をもとに、観音の補陀落浄土を変化浄土と判じたことによって展開し、それが信仰理論として明確に示されたものが『観音講式』であることを、それぞれ論じている。そして、本章のまとめとして、貞慶が臨終時に正念に住することを重視していたことを、『尋思鈔』に論義テーマ「命終心相」を収録し、かつ『臨終之用意』『命終心事』を著し、さらには各種講式にもしばしば「臨終正念」を力説していたことを明らかにしている。

〔第三部　『唯識論尋思鈔』の翻刻読解研究〕

第三部は、第二部で用いた諸論義テーマの中から、特に①「摂在一刹那」、②「一仏繋属」、③「変化長時浄土有無」、④「命終心相」の四論題を取り上げ、翻刻読解研究を行なっている。これら各テーマについては、いずれも「はじめに」と「むすび」を付した上で、「翻刻」「訓読」「註記」「解説」の順に記し、原典の写真も添付している。このような形態をとったのは、第二部の理解を促すためであり、同時に本書が安居の講本である点、および数年後に刊行を予定している『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―教理篇―』の布石として行なったと述べている。

以上の四論題についてみると、まず第一章の①「摂在一刹那」では、『般若臺談抄』「摂在一刹那」（薬師寺蔵）と、『尋思鈔』「摂在一刹那」（身延山大学蔵）の関係を論じている。次に、第二章の②「一仏繋属」では、身延山大学所蔵の『尋思別要』「菩薩種姓一仏

繋属有無」、および東大寺図書館所蔵の『尋思通要』「一仏繋属事」を用い、第三章の③「変化長時浄土有無」では、身延山大学所蔵の『尋思別要』を用いて、「変化長時浄土有無」「「諸仏本願取浄穢二土差別」「知足内院浄穢義」「西方有共義」について述べている。そして、第四章の④「命終心相」では、身延山大学所蔵の『尋思別要』を用いた上で、それぞれ「翻刻」「訓読」「註記」を施した上で、「解説」が為されている。なお、最後の④「命終心相」では、第二部では語り得なかった「同界から同界」「下界から上界」「上界から下界」の命終心のあり方が分析されていることを指摘している。

【結　論】

本書の結論は、貞慶の「唯識観」に関する見解で結ばれている。すなわち、唯識観は自己の智慧のみを錬磨する行ではなく、三性の法を智慧をもって観察するとき、救うべき衆生の姿が見えてくるのであり、故に「大悲利他行」の実践がなされると論説する。ここに唯識観の大きな意義があり、このことを貞慶は弟子たちに伝え、最期を迎えた時には観音の補陀落浄土への往生を欣求して示寂したと言う。

『唯識論尋思鈔』は、『成唯識論』全十巻にわたる論義テーマに対して、詳細な検証をほどこした大部の論義抄であるが、ここに貞慶の仏道に関する編集意図が多々見られると指摘している。また、第三部の翻刻読解研究については、今回は四つの論義テーマが収録されているが、ここにも濃厚な貞慶の仏道論が示されていると述べる。

筆者は『由比岸論尋思鈔』のすべてを翻刻読解することを希望しているが、膨大な分量であるため、現実的には困難としか言いようがなく、そのため『別要』のみは翻刻読解すべく、現在、研究を継続しているところであり、その中にも貞慶の仏道論を論じうるものが多々出てくることが予想されると言う。しかし、まずは本書において法相教義の根幹をなす「五姓論」「三祇論」ならびに浄業の実践による浄土知見の「行道論」による貞慶の仏道論を明らかにしたとして、本書をまとめている。

IV. 審 査 委 員 会 の 評 価

楠淳證氏の本研究論文（著書）について、審査委員会は以下のように評価する。

楠氏の研究は、日本唯識史上における最重要人物ともいえる解脱房貞慶について論及したものである。これまでに貞慶個人を取り上げて研究した著作は皆無であり、またその貞慶が撰述した論義書『唯識論尋思鈔』の研究書も、本書をもって嚆矢とするものである。その意味でも、本研究は画期的な研究であると高く評価することができる。また、本書は広く法相唯識全般についての解説も為されており、唯識思想の概略を把握する上においても、たいへん有益な著書であると言える。さらに、近年、研究が進んできている日本仏教における論義研究を、法相教学の面において力強く推し進めており、本研究によってその重要性が改めて示されたことも注目に値するところである。

しかしながら、論文審査会等においては、審査委員からいくつかの点で意見や確認が求められ、また問題点等が指摘されている。

まず、本書の題名にもある「仏道」とはどういった意味で用いているのかについて、十分に説明がなかったことが指摘された。本書の続編として、「教理篇」の刊行を予定していることを本書の処々で述べているが、教理も仏道であることを考えると、両者の相違が判然としない。また、同様に貞慶の「大悲を実践する仏道」（199 頁）等の表現も、利他という観点から見ると、具体的な貞慶の衆生済度の面が明確に論じられているとは言い難い。何をもって氏の主張するような、貞慶が二利双修を実践していたのかなど、成仏道としての行業論についての言及が認められなかった点は残念である。

また、氏は第一章において、論義と格式の高い法会との結びつきについて紹介しているが、その論証にあたって『釈家官班記』を根拠としている。しかし、同書は 14 世紀初頭に編纂されたもので、貞慶の活躍した時代と 100 年以上の隔たりがあり、若干問題を感じざるを得ない。特に南都三会への出仕が、僧侶の昇進のために重要な役割を果たしていたことを示すのであれば、その制度が明文化された『延喜式』などを証拠としてあげる方がより適切であると考える。制度の成立の最初を論じ、貞慶が活躍した時代とあまり隔たらない時期に作られた良遍の『護持正法章』などの資料を用い、その上で『釈家官班記』を用いた方がより説得力が増したのではなかろうか。

次に、貞慶の論義研鑽が求道の精神、すなわち仏道を真摯に求めた結果であるという本書の主張には賛意を示すものである。しかし、貞慶の論義に対する姿勢は特殊であったのか、あるいは当時の僧侶たちにとっても共通のものであったか、この点についての傾向が明示されていない。本書で検討されている論義は、「摂在一刹那」「多仏繋属」「変化長時浄土有無」などの限られたテーマであり、『尋思鈔』に収載された論題は多岐に上るものであることを考えれば、この点に疑問を感ずる。また、貞慶の次世代とも言える西大寺の叡尊の『御教誡聴聞集』には、律宗の同門であり唐招提寺の再興を成し遂げた覚盛の修学に対して、「彼は論義のために学したり」という批判的な言葉が残されている。これは当時、論義による学問は出世のための修学と批判的に見られた側面があったことを示している。つまり、貞慶の論義研鑽の意味合いは、当時としては特殊であった可能性もあるようにも考えられ、この点については、平安時代から続く諍論や論義による研鑽の中で、どのような位置を占めるものであると考えているのか、その見通しが示されていると、本研究の意義がさらに増したものと思われる。

その他、『貞慶消息』は、後世、「無常詞」として流布しており、これを基に唱道から芸能に至るまで広く受容されていたことは、国文学の分野ではすでに知られていたこと、また浄土願生について、往生のための行因をどのようにとらえられていたのかが明瞭に論述されていなかった点なども指摘された。

本研究には、上述のようには幾つかの問題点があることは否定できない。しかし、これらのことは、決して本書の価値を損なうものではない。本研究は、論義による日本仏教研究の開拓者の一人である楠氏の長年にわたる論義研究の集大成とも言うべき研究であり、氏のこれまでの研究の蓄積が、見事に結実した優れた業績が提示されている。特に、法相唯識史上の巨人である貞慶の仏教者としての姿勢を、新出の論義資料を通じて明らかにし、同時に今後の研究の展望を明示した業績は、学界へも大きく寄与するものとして高く評価されるものである。

以上、審査の結果、本審査委員会は、楠淳證氏が、龍谷大学学位規程第 3 条第 4 項に基づき、博士(文学)の学位を授与される十分な資格を有するものと認めるものである。

2020(令和 2)年 7 月 14 日

主　査：藤丸　　要
副　査：阿部　泰郎
副　査：深川　宣暢
副　査：蓑輪　顕量